

シテ水陸ノ別アルモノニ非ズ本草綱目纂疏云、稭子、往歲中山人傳種於薩摩、一窠生數十莖、每穗盈掌、其利殊多、其穗成岐、時珍言如龍爪是也、コレ眞物ナリ、タウビエ。又カモマタキビトモ呼ブ、六月種ヲ下シテ九十月ニ熟ス、高サ三尺ニ過ギズ、葉ノ形稗ニ比スレバ至テ細長クシテ厚ク、深綠色ナリ、穗ノ形オヒジワニ似テ、五六岐ヲ生ズ、各扁クシテ長サ二寸許、鴨爪ノ形ノ如シ、故ニカモマタキビノ名アリ、實ノ形常ノヒエニ似テ熟シテ青シ、百品考ニ見ヘタリ、救荒本草ノ圖ニ、稭子ノ穗ニハ岐ナク、稭子ノ穗ニ岐アルハ互ニ誤ナリ、

〔成形圖說二十〕比延略。註ホト眞稭神種に對へい

此もの水陸の二種あり、卑溼にうゝるを水稭ウミヒエと云、水田に作れり、萬葉に水をおほみあげに種蒔ひえをおほみえられしゆるぞ我ひとりぬる、即このものなり、信濃岩田村は國の高處にて、六月麥を刈あげ、七月僅に稻穂を出すといへども、間もなく秋霜に傷れて、穎實を結びがたきことあり、故に水稭を作れり、○中略陸稭は山野の樹木を燎夷ヤキヒラゲて、其木灰を肥として、この種を播す也、字鏡に所謂不耕而種を燒蒔ヤキマキとも荒蒔アラマキとも云、即是なり、日向諸縣郡以北、肥後五家の莊に至ては、連山波濤のごとく、絶險狹隘にして稻田を佃ツクリがたく、山民時をうかゞひ、叢林を伐、火を烈て、其灰となるを待つ、乃稭子を播植、これを收て周歲の饗飧に供ふ、俗呼て木場稭キバヒエと云、凡山伐の山林に入て、と云、笠葉とは蒲莖なり、蒲葵の葉管に似たるをもて、菅笠をばこば笠と名く、秋稭は芒多く、猪鹿而して稭子の葉亦菅に似たり、故に稭子を古邊比延と唱といへり、○中略秋稭は芒多く、猪鹿猴も食す、故に山農好て之を種ツクれり、

〔大和本草附錄〕秋稭アキヒエ。ハ毛多シ、猪鹿不食、故ニ農是ヲ好テ種フ、

〔牧民金鑑十一〕弘化元年正月

以一紙致啓上候、然ば弘法稗ヒロノヒトと唱候、至る所實多、作方も辨利の品に付、百姓共江申教、追年作増、凶年之備に圍置候様取計候積、御銘々江も可及御通達旨に而去、卯二月中、右種御渡有之候處、纔に